既久。恬不知怪。上久厭之。至是悉命復衣冠如唐制。……其辮髮椎髻胡服胡語胡姓一切禁止。……於是百有餘年。胡俗悉復中國之舊矣。

と記されて居る。漢土の民が姓名を變じて蒙古名を稱したものゝ少くなかつたことに就いては、趙翼も二十二史劄記卷三十、「元漢人多作蒙古名」篇に於て之を論じ、金人は漢名を有するものが多かつたのに、元に至つては漢人が却つて蒙古名を稱したとして兩者を對比し、兩朝の風會習尚の同じからざるを說き、蒙古語蒙古文を習ふもの多かつたことについても、之を金朝に於る有樣と對比して論述して居る。そうしてかゝる有樣は決して元の開國當時頃だけでは無く、前に述べた所からも知らるゝ通り、終始一貫して執つた態度であつて、かの漢人南人に對し、後になるに從つて益排斥の態度を强めたのと並行する現象である。[28]

元朝の支那文明に對する態度が此の如くであり、一般世人の之に對する迎合的態度がまた此の如くであつたことを知る時に、かの元代文學の特色として認めらるゝ戲曲小說の興隆については、自分は矢張りこれを以て元朝のこの態度が生み出した所に外ならぬと認めたい。支那文明の誇とする禮樂文章の光は薄らぎ、學術は輕んぜられ、蒙古人を初め西方雜多の族人が上に立ちて治者としての權力を振ひ、曲阜の孔廟に賜ふた詔勅にも、蒙古語はいふまでもなく、波斯文の數行が記されるやうな時代に、[29] 自から俗文學の發達を促がし、文人才子の處を得ずして風懷をかゝる方面に向けるものゝ少くなかつたのは、自然の勢として認めることが出來ると思ふ。[30]

之を要するに、元朝一代を通じてすべての方面に蒙古主義を貫徹しようとし、漢文明に對しても、敢てこれを尊